

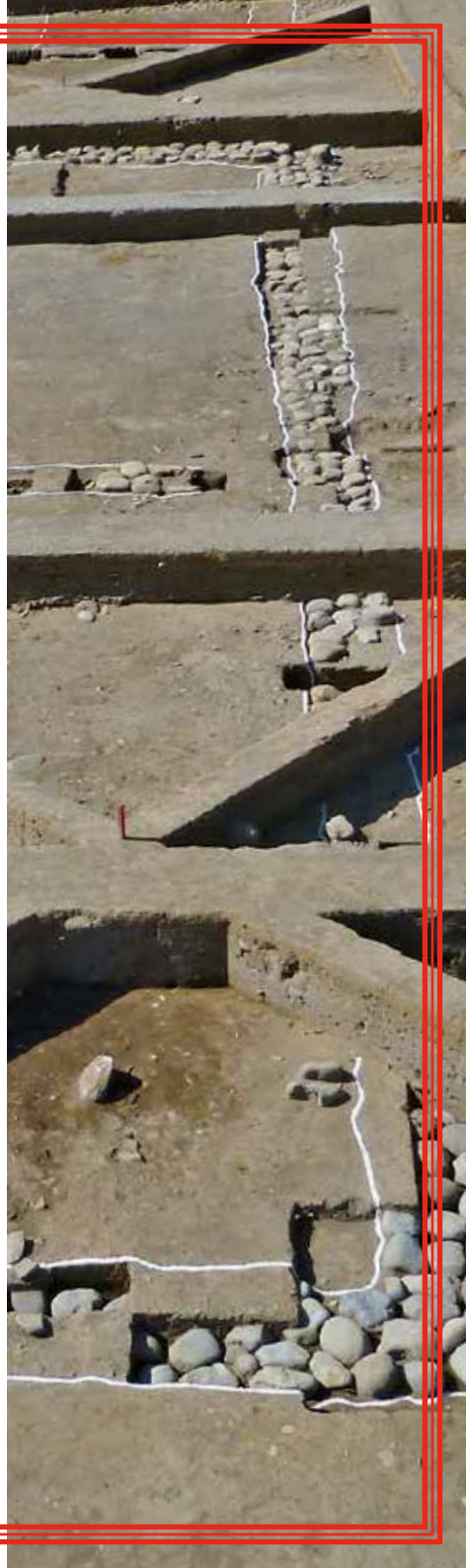


ここまでわかった！

御用米曲輪

ごようまいくるわ

—発掘調査から探る小田原城の歴史—



はじめに

国指定史跡小田原城跡御用米曲輪では、江戸時代の曲輪取り・蔵の位置等の遺構を把握することを目的とする発掘調査を行ってきました。その結果、江戸時代の遺跡の下層に戦国時代の遺構が濃密に展開していることが明らかとなりました。そのため、江戸時代の遺構がない箇所では下層の調査を行い、重なり合う江戸時代と戦国時代の遺跡を活かした史跡整備を行うための調査・研究を進めることとなりました。

本書では、これまでに実施した第10次調査までの発掘調査でわかった御用米曲輪の姿をご紹介します。小田原城の歴史を考える上でも大変貴重な発見が数多くありましたので、調査で確認した3つの時期（御用米曲輪上層（江戸時代後期）、御用米曲輪下層（江戸時代前期・戦国時代））を中心に御用米曲輪の場所がどのように使われていたのかを探っていきます。

今後、整備に向けた調査・研究の進展によっては本書と異なる見解が示される可能性もありますが、現時点での考え方の到達点をご紹介します。

1. 御用米曲輪の立地と変遷

小田原城は、箱根外輪山から延びる丘陵上に位置しています。江戸時代の小田原城本丸はその先端部の標高約30mの位置にあります。本書で取り上げる御用米曲輪は本丸の北側、標高は約15mで、二の丸と本丸の間に位置しています（第1図）。

御用米曲輪とは、その名前の通り徳川幕府御用米を納める蔵が所在した曲輪で、1620年代に描かれたと考えられている「相州小田原古絵図」（通称「加藤図」）には建物が並んでいる様子が描かれており（第2図）、1640年代に幕府の命令で作成された「相模国小田原城絵図」（通称「正保図」）では「ひやっけんくら百間蔵」との文字が記されています（第3図）。

また、1860年代前半に描かれたとされる通称「文久図」には、6棟の蔵の姿が描かれ（第4図）、江戸時代を通じて米蔵が所在した曲輪だと考えられています。



第1図 御用米曲輪の位置

▶ 徳川將軍家の御殿がある本丸の手前、小田原藩主の御殿がある二の丸より奥にあるという、位置関係からもその重要性がうかがわれる。





第2図「加藤図」部分

▶寛永小田原地震(1633)以前の「府内図」。桁行の長い建物が複数棟描かれている。



第3図「正保図」部分

▶天正16年(1588)の文書に「百間蔵」とあり、それ以降蔵があったと考えられていた。



第4図「文久図」部分

▶土塁上に3棟、平場に3棟、合計6棟の瓦葺き・白壁の蔵の姿が描かれている。

2. 近現代の御用米曲輪

明治維新を経て、小田原城内の主要建物は払い下げられ、御用米曲輪の蔵も明治5年(1872)には売却されました。その後、小田原城の本丸・二の丸は宮内省の管轄となって御用邸が建築され、御用米曲輪もその一部として利用されました。

大正12年(1923)、御用邸は大正関東地震により甚大な被害を受けたために廃止され、以後は神奈川県有地となりました。その後、御用米曲輪は野球場や臨時駐車場として利用されていましたが、文化庁からの指導に基づき、平成22年(2010)から史跡整備を進めるための発掘調査(第2～7次調査)を開始しました。



写真1 埋設土管

▶御用邸に関連する建物に伴うと考えられる土管とその竪坑。土管は「ト製」の刻印がある常滑焼の製品。



写真2 第1次調査の様子

▶小田原城跡は国史跡指定以降も史跡として不適切な利用が続いた。昭和57年(1982)には小学校建設計画が浮上し、第1次調査が行われた。



写真3 解体中の野球場

▶発掘調査(第2次調査)は、昭和24年(1949)に建設された市営野球場関連施設の解体撤去工事に伴う調査からはじまった。



3. 御用米曲輪上層の主な遺構

小田原城内でありながら徳川幕府の御用米を納める重要な曲輪

御用米曲輪には蔵が最大6棟存在したほか、文献史料からは侍番所・留守居之物居所・土羅・古材木入置候小屋・稲荷社などがあったことがうかがえます。蔵には、幕府天領より納められた「御用米」のほか、塩やアラメ（海藻）も収められていたようです。

発掘調査では、北東土塁の上に3棟、曲輪内の平場に3棟の合計6棟の蔵跡が確認されています（第5図）。また、御用米曲輪の南裾を巡る溝の発見により、江戸時代の曲輪の範囲を捉えることができた点も重要な成果となりました（写真12）。

蔵の跡が見つかった位置は、通称「文久図」に描かれた建物の位置と一致しています（第4図）。小田原城を描いた「府内図」「城内絵図」を見ると、土塁の上の蔵は寛文12年（1672）作成の通称「寛文図」でも確認できるため、1672年には存在していたことがわかります。一方、平場の蔵については、蔵かどうか不明瞭な通称「加藤図」の描写を除くと（第2図）、1680年代に描かれたと考えられている通称「大久保貞享図」以降で確認できるようになり、はじめは2棟、1820年代以降に3棟となったことがわかります。



①写真4 1号蔵跡

▶北東の土塁上に造られた3棟の蔵の一つ。人頭大の礫を含んだ布基礎構造となっているが、石の密度は低い。



②写真5 3号蔵跡

▶土塁上の蔵。円礫による布基礎構造の上に石垣の平石のような切石を小口面を揃えて並べている（写真右）。



③写真6 5号蔵跡

▶曲輪内の平場に造られた3棟の蔵のうちのひとつ。円礫を充填した布基礎構造で、土塁上の蔵と異なる。



④写真7 北西の土塁

▶盛土で構築された土塁。土塁上は、現在は駅から天守閣への最短ルートであるが、本来は道ではなかった。



⑤写真8 北東の土塁

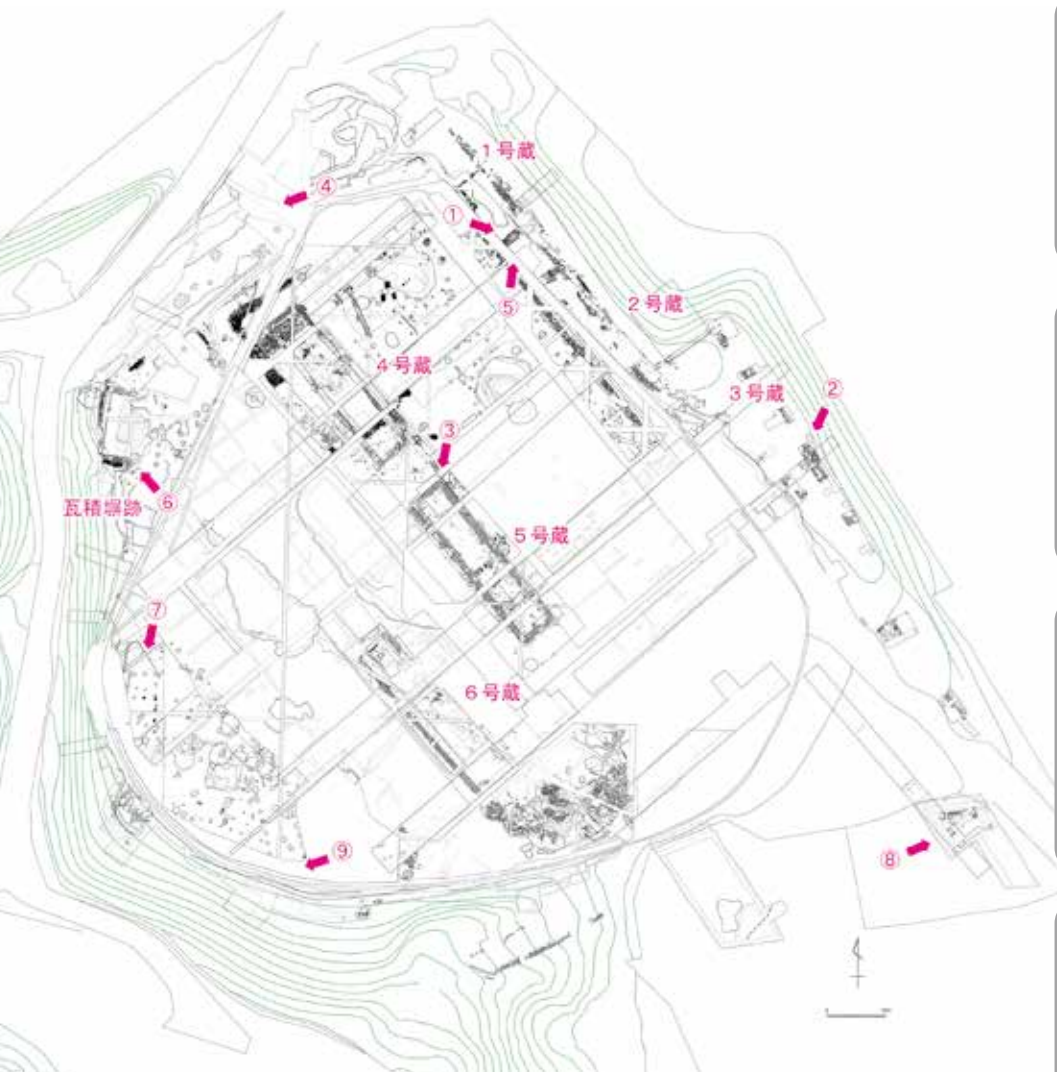
▶北西の土塁と異なり、薄く土を積み上げて固めた版築土塁。含まれる瓦から1630年代の構築と考えられる。



⑥写真9 1号瓦積堀跡

▶半壊した状態で発掘された瓦積堀。近世小田原城の建築物であることが確実な唯一の構造物となった。





第5図 御用米曲輪上層の遺構配置図



⑦写真10 1号掘立柱建物跡
 ▶梁行2間・桁行6間以上の掘立柱建物跡。通称「宮内庁図」(1700年頃)ではこの辺りに2棟の建物が描かれる。



⑧写真11 御用米曲輪南東堀
 ▶御用米曲輪と二の丸とを区画する堀。上幅11m以上、深さは約3mで、低い石垣を持つ。



⑨写真12 2号溝
 ▶御用米曲輪南側^{のりめん}法面^{すそ}の裾を巡る溝。新発見の遺構で、本来の曲輪の範囲を示す遺構であると考えられる。



(1) 御用米曲輪上層の主な遺構

蔵 跡

小田原市立中央図書館所蔵の「小田原城并見附図」には、土塁上の蔵の規模として「三間梁／拾五間」と記されています。また、第1次調査では平場の蔵3棟が京間（1間＝6尺5寸≒1.9695m）で、梁行3間・桁行15間（約5.9m×約29.5m）であったことが確認されています。

このことから、御用米曲輪の蔵は京間で梁行3間・桁行15間の規模であったと想定されます。残念ながら、土塁上の蔵は野球場の観覧席が構築されていたこともあって、大きく壊されていましたが、同様の規模であったと考えられます（写真4～6・14・15）。

ただし、発掘調査で確認できた平場の蔵に伴う布基礎の構造は3棟それぞれで異なっていました。4号蔵の基礎は溝を掘り、人頭大の円礫を乱雑に並べ、その上に砂利を充填したものでしたが（写真17）、5号蔵の基礎は溝を掘り、砂利を敷き、その上に人



写真13 基礎構造の記録作業

▶見つかった遺構を測量し、構造の違いを記録していく。



写真14 2号蔵跡

▶クスノキの根や野球場のスタンド等による強い攪乱を受け、保存状態は悪い。



写真15 3号蔵跡

▶土塁上に造られた3号蔵の下層では石垣が見つかっている（写真右）。寛永小田原地震後の造成により埋没したものと考えられる。3号蔵はその上に布基礎を回し、平石を据えて建てられている。



写真16 5号蔵跡

▶平場に造られた蔵の布基礎遺構の上層は削平されている可能性があり、本来は平石が伴ったと考えられる。



頭大の円礫を並べ、さらに土を盛り、砂利を敷き、円礫を並べている状況でした（写真16）。6号蔵の基礎は明確な溝を掘らず、円礫と砂利の利用も限定的でした（写真18）。これらの違いが、構築時期により生じたものか、納入物による相違かはわかりませんが、御用米曲輪平場の蔵跡の大きな特徴です。

また、文献史料からは蔵の建て替えや地震による倒壊等の記録が確認できますが、発掘調査で明確な遺構の切り合いや重複関係は確認できていません。さらに、発掘調査では貞享3年（1686）の「稲葉氏引送書」に「一棟桁行十三間 一棟桁行十二間」と記された蔵の痕跡も確認できておらず、蔵の変遷解明は今後の課題です。



写真17 4号蔵跡と瓦を充填した溝

▶ 4号蔵を囲むように多量の瓦を充填した溝が確認された。蔵への除湿のための溝か。中央の溝は野球場のフェンスにより壊されていた部分。下層では戦国時代の遺構が顔を出す。



写真18 6号蔵跡（写真左）

▶ 「文政四辛巳蔵」との刻印のある瓦が周辺で出土していることから、6号蔵が増築されたのは文政4年（1821）頃の可能性が考えられる。6棟の蔵の中で最も新しい。



写真19 伝御用米曲輪の蔵の戸

▶ 御用米曲輪の蔵の引き戸と伝わる遺品が天守閣に所蔵されている。縦180.5cm×横177.3cmであるが、遺構のサイズとは合わない。



かわら つみ べい
瓦 積 塀

御用米曲輪西側の土塁屈曲部付近で、瓦と土を交互に積み上げた瓦積塀が見つかりました（写真9・20・21）。

見つかった瓦積塀は下部のみであるため、本来の高さや上部構造は不明ですが、利用されている瓦の年代観から元禄16年（1703）の元禄小田原地震で被災した瓦が転用されている可能性が指摘できます。

瓦積塀は2列あり、瓦積塀を繋ぐように、背後となる土塁の裾には円礫が最大3段積まれています。その手前には風祭石の切石による石列があり、内部には砂利が敷き詰められていました。正面には5間以上の掘立柱列があり、これらにより閉塞した空間を造っていたものと考えられます（写真20）。

この空間がどのように使われていたのかはわかりませんが、構造的には宗教施設や煙硝蔵等の可能性が考えられます。

この瓦積塀は、相次ぐ災害や明治維新後の解体により、確実な江戸時代の建物が残っていない小田原城にとって、唯一残る確実な建築物ということが出来ます。



写真20 瓦積塀に囲われた空間

▶通称「宮内庁図」には、この位置にL字型の施設に囲まれた建物が描かれている。瓦積塀内部では建物の痕跡は確認できていない。



写真21 1号瓦積塀跡（北から）

▶板状のものが瓦。上部は壊れているが、根府川石を基礎として土と瓦を交互に積み重ねている。



(2) 御用米曲輪上層の主な出土遺物

御用米曲輪では、推定15トンを超える大量の瓦が出土している他は、土器や陶磁器、煙管、銅銭、鉄砲玉などが僅かに出土している程度です。出土瓦については現在整理作業中ですので、今後の調査で色々なことがわかっていくことが期待されます。その中で、特筆すべきこととして、徳川家の「三ツ葉葵」紋の瓦が多く出土したことがあります（写真22）。鬼瓦もありますが（写真23）、軒丸瓦が120点以上出土しており、またその「三ツ葉葵」紋軒丸瓦の種類は10種類を超えます。

小田原藩主で「三ツ葉葵」紋を用いた大名はおらず、小田原城が徳川幕府と深い関わりのある城であったことを示す重要な出土品といえるでしょう。

他に、稲葉家の家紋である「折敷に三」（写真24）、大久保家の家紋である「上り藤に大」（写真25）の紋様を持つ鬼瓦も出土しています。



写真22 「三ツ葉葵」紋軒丸瓦

写真23
「三ツ葉葵」
紋鬼瓦



写真24
「折敷に三」
紋鬼瓦

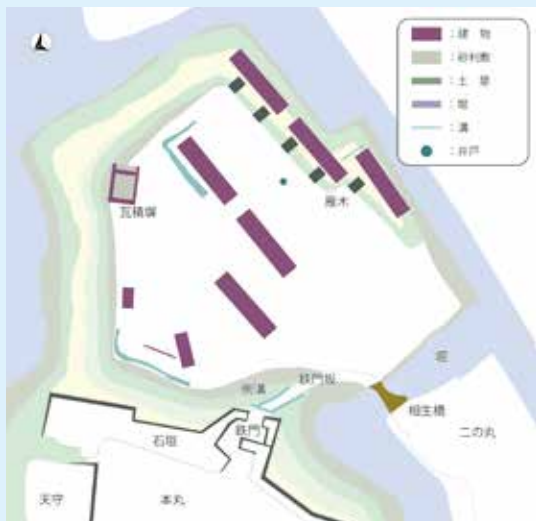


写真25 「上り藤に大」紋鬼瓦

(3) ここまでわかった！江戸時代後期の御用米曲輪

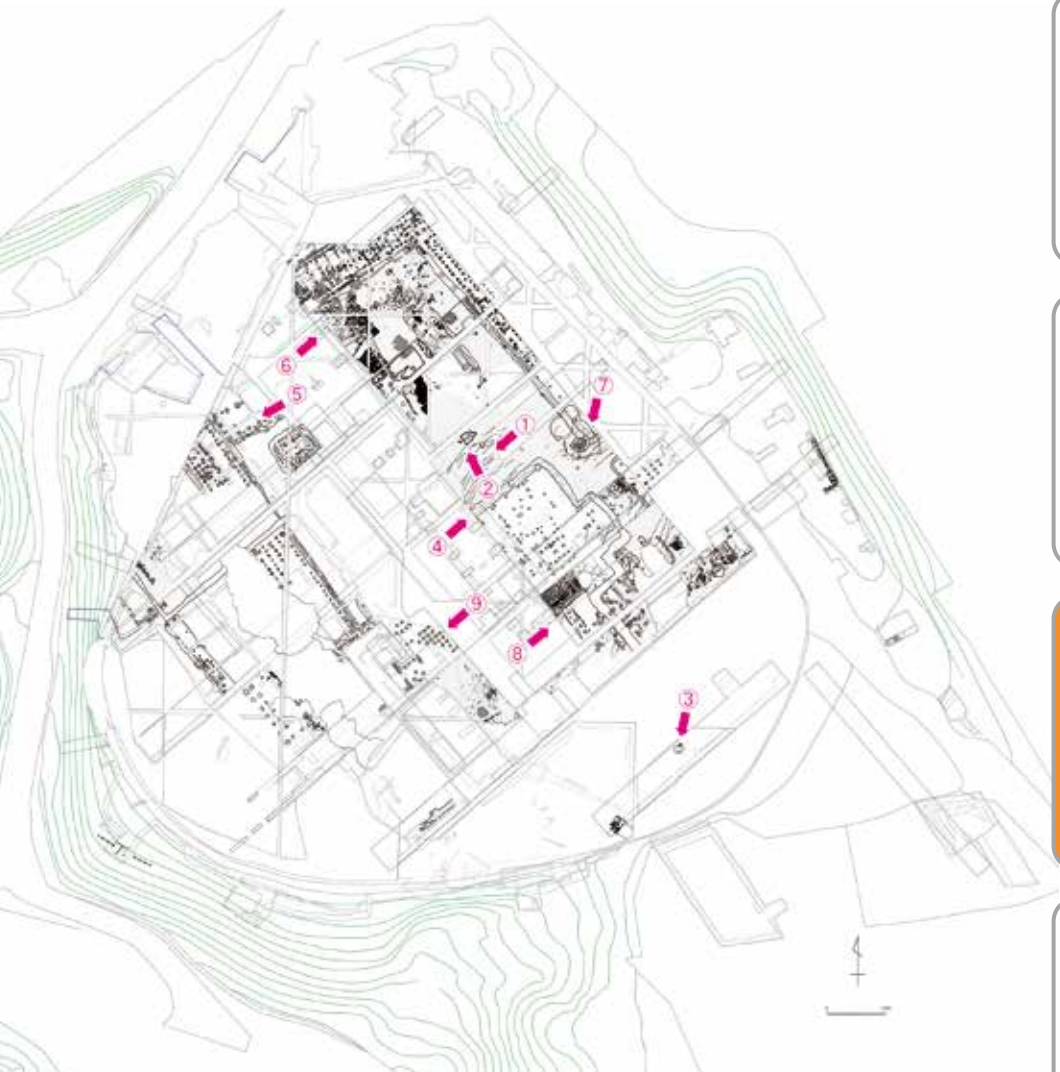
江戸時代後期の御用米曲輪の様子は、通称「文久図」の描写にみられ、発掘調査で確認できた内容とほぼ一致しています。稲荷社などの施設の存在は確認できませんでしたが、瓦積堀を伴う建物の存在などの新たな発見もありました。

発掘調査成果を踏まえると、江戸時代後期の御用米曲輪は第6図のような景観だったのでないかと考えられます。



第6図 江戸時代後期の御用米曲輪





第7図 御用米曲輪下層の遺構配置図



⑦写真32 石組井戸

▶井戸の上部は残っていないが、覆土上層には地震後の盛土層や瓦が堆積していた。一段階新しい。



⑧写真33 砂利敷

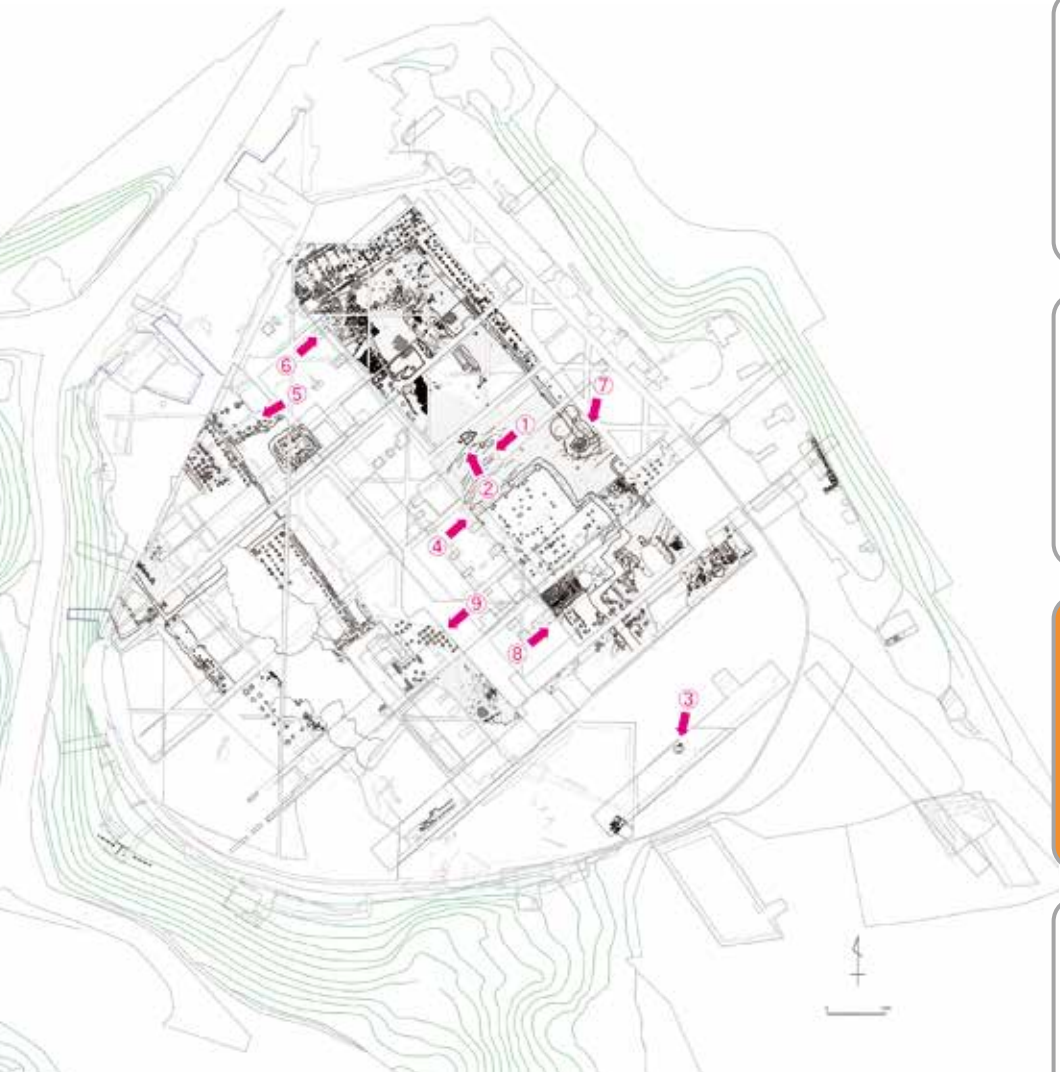
▶細かい砂利を叩き締めた砂利敷の空間が広く確認できた。写真右側の溝は雨落ち溝か。



⑨写真34 9・10号礎石建物跡

▶戦国時代の石組水路の上に礎石が確認できるため、戦国時代より新しい建物であることがわかる。





第7図 御用米曲輪下層の遺構配置図



⑦写真32 石組井戸

▶井戸の上部は残っていないが、覆土上層には地震後の盛土層や瓦が堆積していた。一段階新しい。



⑧写真33 砂利敷

▶細かい砂利を叩き締めた砂利敷の空間が広く確認できた。写真右側の溝は雨落ち溝か。



⑨写真34 9・10号礎石建物跡

▶戦国時代の石組水路の上に礎石が確認できるため、戦国時代より新しい建物であることがわかる。



(1) 御用米曲輪下層の主な遺構

地震後の盛土層

関東ローム層の再堆積土を中心とする土層には、多くの地割れは届いていません。もちろん元禄16年（1703）や天明2年（1782）、大正12年（1923）の地震などもありますので、この層に達している地割れも確認できますが、多くの地割れはこの土層の下で止まっているのです。そのため、この土層は寛永小田原地震後に造成されたものと判断されます。

地震の翌年、寛永11年（1634）には
將軍徳川家光の上洛が予定され、小田原城への止宿も決まっていた。そのため、被災後の小田原では急ピッチで改修工事が進められました。この盛土層の存在により、御用米曲輪の遺跡は1633年を境に大きく上層と下層に分けて捉えることができます。（この盛土層の時期は二時期に分けて捉えられる可能性もあり、検討中です。）



写真 35 関東ローム層の再堆積

▶礎石建物の上には、関東ローム層が厚く堆積していることが土層の観察からわかる。地震後に大規模な埋め立てが行われた。

礎石建物

寛永小田原地震被災面では、複数の礎石建物が見つかっています（写真29・30・31・34・36）。礎石の間隔は6尺（ $\approx 1.818\text{m}$ ）、6尺2寸5分（ $\approx 1.8939\text{m}$ ）、6尺5寸（ $\approx 1.9696\text{m}$ ）など様々ですが、6尺が多いようです。礎石の大きさは人頭大程度とそれほど大きくはありませんが、12cm前後（4寸か？）の角柱痕が確認できる礎石もあります（写真37）。

この時期の礎石建物の特徴は、素掘りの溝を伴っている点にあるようです。

中でも9・10次調査で確認した御用米



写真 36 11号礎石建物跡

▶周囲に砂利面を伴う建物と想定される。



5. 戦国時代の御用米曲輪

戦国大名北条氏の居館

御用米曲輪では、第1次調査でも戦国時代の遺構が確認されていました。そして、第2次調査に際し、野球場関連施設の解体工事中に戦国時代の小田原城で多く用いられた障子堀が見つかりました（写真46）。この発見を受け、神奈川県や文化庁との協議を行ったところ、小田原城の戦国時代の様相を正確に把握するために、調査範囲を拡張する必要があるとの方向性が示されました。

そこで、江戸時代の遺構を保存することを最優先としながら、御用米曲輪下層に展開する戦国時代の遺構を確認するための調査を行うことになりました。

その結果、石組水路によって区画された空間の中に多くの礎石建物や掘立柱建物があり（写真38・39）、建物に隣接して池や切石を敷き詰めた庭園（写真40～43）、砂利敷の空間などの遺構が存在することがわかりました（写真45・47）。また、武家儀礼に用いられるかわらけが多量に出土していることから、武家居館としての様相を示し、戦国時代の小田原城の中核の一つであることがわかりました。



①写真38 石組水路

▶石組水路は、これまでに20条以上見つかっている。クランクしながら直線的に配置され、配水とともに建物を区画する役割があったものと考えられる。



②写真39 12号礎石建物跡

▶梁行3間以上・桁行5間の礎石建物で、周囲には砂利が敷かれ、石組水路で囲まれていた。南側（写真右）は壊されていたため、範囲は不明。



③写真40 1号池

▶箱根安山岩の石塔部材（灰色）や鎌倉石（黄色）、風祭石（黒色）を用いたカラフルな池。この池から2号池へと水が落ちる構造となっている。



④写真41 2号池

▶石塔部材を転用し、池の護岸が造られている。1.7mを超える深い池から砂利の州浜を持つ池へと改修した痕跡が確認できている。



⑤写真42 2号切石敷遺構

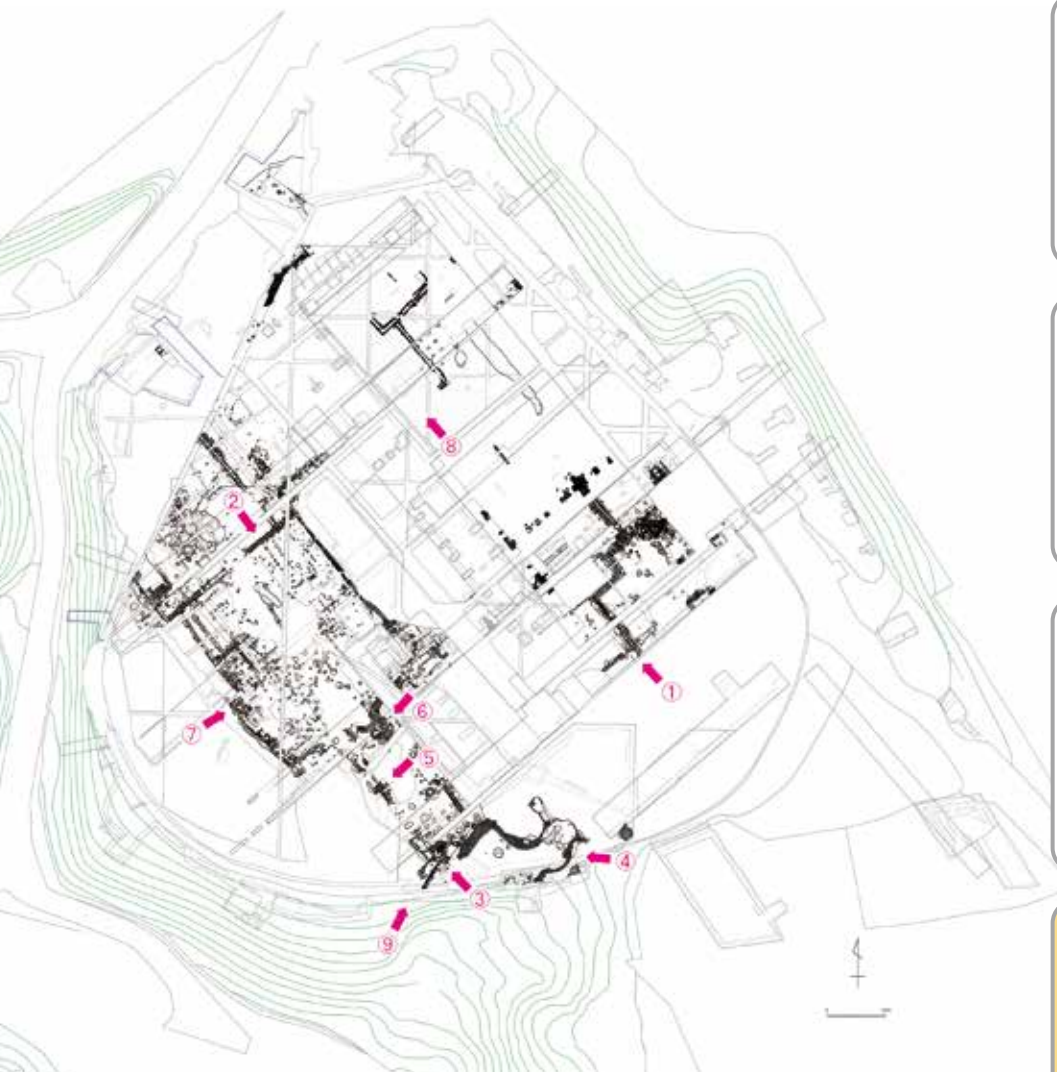
▶南北は壊され、全体像は不明。底面には石塔の転用材が並べられ、風祭石を西側に立てている。南側の山側から水を流していたものとみられる。



⑥写真43 3号切石敷遺構

▶鎌倉石と風祭石を幾何学的に加工し、モザイク模様のように不規則に組み合わせている。安山岩の巨石が配され、中央には深さ1mの円形孔がある。





第9図 御用米曲輪の戦国時代遺構配置図



⑦写真44 6号井戸

▶表面に風祭石の切石が敷かれており、内部は円礫を積み上げている。このような井戸は他になく、特別な井戸であったと考えられる。



⑧写真45 砂利敷

▶砂利や拳大の円礫を敷く範囲が何箇所も確認されている。基本的には建物内部にはなく、建物の外側に敷かれており、広庭としての役割も想定される。



⑨写真46 1号堀

▶第2次調査で確認した障子堀。この堀の発見が契機となり、御用米曲輪下層の調査が行われることとなった。廃絶後は2号池への導水路となる。



(1) 戦国時代の御用米曲輪

御用米曲輪は南西に山を背負い、北東には蓮池が位置するという立地環境にあります。戦国時代の遺跡は、その地形に沿った方位軸で、正方位からおよそ48度傾いた軸線となっています。石組水路で整然と区画された空間に、建物群を中心として庭園や井戸などを配置した景観が想定されますが、玉石や砂利敷、建物跡の切り合い関係から、戦国時代の中でも複数期にわたる建て替えが行われていたと考えられます。中でも中心となる遺構群は、四代北条氏政の時代のものであると考えられます。

しかし、小田原合戦以後の改変や寛永小田原地震、その後の盛土造成や土地利用により、壊されたり失われたりしている部分が多く存在します。また、江戸時代の遺跡も国指定史跡小田原城跡の一部として守り伝える必要があるため、米蔵の跡をはじめとする遺構検出範囲を破壊するような発掘調査はできません。そのため、残念ながら御用米曲輪下層の全体像は確認できておらず、ちょうど中央に江戸時代後期の米蔵遺構があることから、北側と南側に分断された様相となっています。



第10図 北条氏政
(小田原城天守閣蔵)



写真47 御用米曲輪南側の主な戦国時代の遺構（上空から）

▶戦国時代の主な遺構は、建物や池庭を構成する遺構が連携して空間を形成しているため、本章ではまとめて紹介する。



現在確認できている範囲の中では、南側では石組水路により区画された5つの区画を想定することができます（第11図）。南側5区画のうち、仮にⅠ区とⅡ区とした区画は攪乱などの影響により詳細は不明となっています。南側の中心は中央のⅣ区で、最も大きな7間×7間と想定される礎石建物を中心とする空間です。この建物の東



第11図 御用米曲輪南側における戦国時代の主な遺構配置



側には切石敷遺構があります。そして、南側では表面を切石で化粧した井戸を伴う梁行3間半・桁行7間半の礎石建物、西側では切石による排水施設を持つ2間×2間の礎石建物と連結しています。切石敷遺構は、黒色の溶結凝灰岩（風祭石）と黄色の凝灰質砂岩（鎌倉石）により形成され、安山岩の巨石を要所に配する構造であることから、造庭であると考えられます（写真43・49～51、第12図）。このことから、造庭を望む7間×7間の大型礎石建物は「会所」^{かいしよ}、2間×2間の礎石建物は「湯屋」^{ゆや}ではないかと想定されています（第11図）。

切石敷遺構は、区画を形成する石組水路と連結してIV区の周囲をぐるりと囲み、内側には他にも2棟の礎石建物の存在が確認できます。残念ながら礎石の残りが悪く、



写真 48 2号切石敷遺構



第12図 3号切石敷遺構



写真 49 3号切石敷遺構



建物の全体像は確認できていませんが、建物想定位置の外には砂利が敷かれた痕跡があるため、それを基準に礎石建物の位置を想定しています。その結果、この区画の中には合計5棟の建物が存在したと考えられます（第11図）。

その東側の区画（Ⅴ区）には、砂利が敷かれた空間の中に大型の掘立柱建物跡と2基の池、切石敷遺構や井戸などが位置しています。掘立柱建物は直径100cmにもなる柱穴により構成されており、2間×4間以上の建物です。Ⅳ区とは異なり、建物直下にも砂利が敷かれていることから、この掘立柱建物は「^{さじきでん}棧敷殿」などの高床建物になるのではないかと考えられます。そして、この建物の脇には大型の池、南側には小型の池があります。小型の池（1号池）は約8.5㎡の小規模なもので、そこから滝状の施設を通して、下段に位置する大型の池へと水が流れる構造だったよ



写真50 3号切石敷遺構中央の円形孔



写真51 3号切石敷遺構の一部



第13図 改修後の池跡



うです。下段の池（2号池）は、発掘調査で確認した範囲だけでも約190㎡に及ぶもので、その範囲は江戸時代の鉄門坂の下へとくろがねもんざか潜り込んでいたため、確認できませんでした。

これらの池の大きな特徴は、石材で護岸されていることです。2号池には二次加工を施した石塔部材が1,200点以上用いられていました。また、池の護岸最上部や1号池の周囲は鎌倉石を用いて化粧をしており、石材の色調を活かした構造であったこともわかっています。一方、西側のⅢ区では、方



写真52 1号池

▶1号池にも写真左手の滝口を埋め立て、改修した痕跡があった。写真は1時期目の姿。



写真53 州浜

▶護岸際に砂利を入れて州浜にしている。



写真54 3号石組遺構

▶1号池の導水に用いられていたと考えられる。左手山側より水が落ち、下部開口部より水が流れ出る構造となっている。



写真55 2号池下層

▶改修前の池は十分な深さのある構造であった。護岸の石の状態から、水位は1.7mであったと考えられる。





写真56 転用された石塔部材

▶写真55の土嚢部分は江戸時代以降に壊されていた。周囲には壊された護岸石が散在していた。



写真57 9号石組水路

▶石組水路からは多くのかわらけが出土している。(詳しくは22ページ。)



写真58 かわらけ廃棄土坑

▶何層にもわたってかわらけが廃棄されている。(詳しくは22ページ。)



写真59 石組水路

▶整然と整えられているが、複雑に屈曲して配置されている様子がわかった。

形竪穴状遺構や多数のかわらけ廃棄土坑が確認されています。さらに西側は尾根となっていることから、西側は奥・裏手空間となっていた可能性が指摘できます。

一方、北側には複雑に石組水路が展開しており、明確な区画の単位を抽出することができません。しかし、砂利が叩き締められた空間を中心に砂利を含む硬化面などが広く広がっていたようです。このことから、北側には砂利敷き広場（広庭）を中心とした空間が展開していたのではないかと想定されます。



石へのこだわり

戦国時代の遺跡では、様々な石材が用途に合わせて使い分けられていました。現代であれば、ホームセンターで最適な石材を選んで購入することができますが、戦国時代にはそれぞれの産出地に赴き、選別して採取してこななくてはなりません。様々な石材が使われているということは、石を見分ける知識や目利き、それを採取して運び込む労力やこだわりがないと成立し得ません。文献史料からは、戦国大名北条氏の配下には「関東石切棟梁」を任された「石切」と呼ばれた石材スペシャリスト集団がいたことがわかっています。おそらく、そのような職能民の力により、戦国時代の居館は造られたのだと考えられます。



写真60 3号切石敷遺構

▶造庭と考えられる切石敷遺構には、鎌倉石（三浦半島周辺の凝灰質砂岩）と風根石（箱根火山で形成された溶結凝灰岩）が使われている。産地も異なるが、見た目の色合いも大きく異なる。これらを幾何学的に切り出し、モザイク状に組み合わせて敷き詰めて、特徴的な景観を造り出している。



写真61 2号池護岸

▶池の護岸には、石塔部材を二次加工した石材が数多く使用されている。これらの石材は、そのまま積み上げたのではなく、必要に応じて隅切りを行って組み合わせている。宝篋印塔の隅飾りや段を悉く削り、再利用している様子が当時の人々の石塔などの石造物に対する考え方やリサイクル精神をうかがうことができる。



写真62 砂利敷

▶建物の外側や広庭と考えられる空間には、砂利や玉石が敷き詰められている。砂利には丹沢山系のグリーンタフが含まれることから、酒匂川以東で採取されたと考えられる。場所によりそのサイズが異なるため、きちんと選択された砂利が使われていることがわかる。



写真63 玉石敷

▶玉石は拳大の大きさの安山岩が選ばれ、小田原の荒久海岸（早川河口から新川付近）で採取される石材を用いていることがわかる。玉石が敷かれているところは限られており、砂利と違って歩きにくいことから、人が出入りすることよりも見た目を重視した利用を想定することができる。



(2) 戦国時代の主な出土遺物

御用米曲輪下層から出土した遺物の98%以上はかわらけです。かわらけには、関東地方で主に用いられたロクロ成形（右回転）のものと、京都系とされる手づくね成形のものがあります。手づくね成形のかわらけは、二代北条氏綱の頃に小田原へと導入され、京都の文化や儀礼を強く意識していた北条氏の志向性を示す遺物とされます。

手づくね成形かわらけは、小田原城周辺でも限定的に出土している様子が確認されています。また、関東各地の北条氏の支城でもわずかに持ち込まれています。そのような状況にあって、御用米曲輪では手づくね成形のかわらけや手づくね成形かわらけを模倣したとされるロクロ成形左回転のかわらけが出土かわらけの大半を占めています。これらのかわらけには、墨書を施したもの（写真64）、金箔や金泥を施したものなども



写真64 墨書かわらけ



写真65 金箔かわらけ



写真66 かわらけ





写真67 陶磁器



写真68 雲母
うんも



写真69 釘
しゅかいこ



写真70 筭
こうがい

あります（写真65）。このような限定的なかわらけの出土比率、特異な利用状況からも、御用米曲輪の特異性が垣間見えます。

陶磁器では、中国産の陶磁器や国産陶器などが出土していますが（写真67）、威信財とされるような盤や瓶、酒海壺などのような大型の優品は出土していません。座敷飾りなどとして用いられたであろう優品は持ち出されてしまったのでしょうか。

この他、^{もんこう}聞香の道具である「^{ぎんよう}銀葉」として用いられたと考えられる雲母片や釘・飾り金具、筭などもわずかに出土しています（写真68～70）。

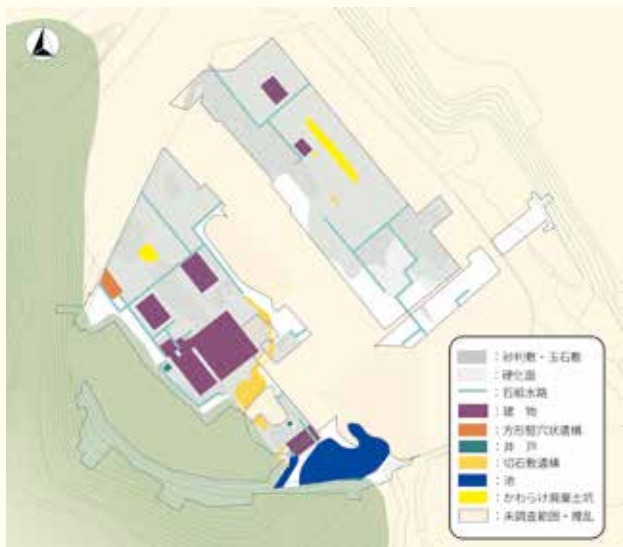


(3) ここまでわかった! 戦国時代の御用米曲輪

戦国時代の調査では、池や切石敷遺構による造庭を持つ空間と砂利を敷き詰めた広庭が確認されました。砂利敷の広庭を中心とする北側の空間は、ハレ・表の空間であった可能性が想定できます。残念ながら、その主体を成したであろう「主殿」の存在は確認できませんでしたが、江戸時代の米蔵跡の下などに存在した可能性が想定されます。一方、南側の空間は造庭を中心に「会所」と考えられる建物が検出されている様子などから、ハレ・奥の空間であった可能性が想定できます。

戦国時代の大名は、広庭を伴う「主殿」、造庭を伴う「会所」を備えた居館を構築し、そこで武家儀礼を行いました。そのような居館の姿は、『洛中洛外図屏風』などにも描かれており、一乗谷朝倉氏関連遺跡（福井県福井市）などの発掘調査でも確認されています。小田原城にもそのような空間構成の居館が存在した可能性は高く、まさに御用米曲輪下層の遺構群はそのひとつであったと考えられます。大量のかわらけが出土している様子からも、御用米曲輪下層が武家儀礼を催す重要な空間であった可能性が指摘できます。

小田原城内にこのような居館を設けられるのは、北条氏の当主クラスの人物であると考えられます。出土遺物の様相などから、この建物群は永禄8年（1565）に三代北条氏康から家督を継いだ氏政の居館（氏康は隠居後に「御本城様」と呼ばれているため、引き続き本城に居住した）、あるいは天正8年（1580）に家督を五代北条氏直に譲った北条氏政の隠居館（「本城」は織田信長の婿となる氏直が居住した）として整備された可能性があります。



第14図 戦国時代の御用米曲輪

▶ 御用米曲輪は本丸から覗き込まれる位置にあり、小田原城の中ではNo.1の場所と言えない点も、どのような使われ方をしたかのヒントとなり得る。



6. 原始・古代の御用米曲輪

前章で紹介した戦国時代の下層にも石組水路を伴う居館構築以前の戦国時代の遺構面が展開することが断片的にわかっていますが、さらに下層では原始・古代の遺構・遺物も見つかっています。市内最古の旧石器時代の石核（写真71）、縄文時代中期（五領ヶ台式・勝坂式・曾利式など）の土器（写真72）や、弥生時代の土器が出土しています。

また、古墳時代から奈良・平安時代の住居跡が見つかり、灰釉陶器や土師器甕（写真73）なども出土することから、集落域であったことが窺えます。



写真71 旧石器時代の石核



写真72 縄文時代中期の土器



写真73 土師器甕（8世紀代の駿東甕）

7. 御用米曲輪のこれから

史跡小田原城跡の整備については、平成5年（1993）3月に『史跡小田原城跡本丸・二の丸整備基本構想』を策定し、本丸・二の丸エリアを「原則として江戸時代末期の姿を標準として整備する」とする一方で、「例外として、発掘調査により小田原北条氏時代等の特性を表す遺構が発見された場合には、その歴史的特性を十分に把握しながら、「江戸時代末期」に縛られない整備を行う」という時代設定をしています。この構想は、令和3年（2021）3月に策定した『史跡小田原城跡保存活用計画』にも引き継がれています。

平成30年度に整備した北西土塁は、発掘調査成果を基に法面を保護する盛土を行いました。調査で確認した土層の堆積状況を表示するとともに、見学者の安全対策として駒寄の柵を設置しています。平成31年度に整備した北東土塁は、発掘調査成果や通称「宮内庁図」などを参考に土塁を復元し、



写真74 北西土塁の土層堆積状況の表示





写真 75 整備した北東土塁



写真 76 復元された瓦積塀

土塁上に蔵跡を平面表示で表現しました。土塁への登り口となる雁木（階段）は発掘調査では確認できませんでしたが、二の丸馬屋曲輪を参考に、通称「宮内庁図」に描かれた位置に復元しています。

瓦積塀については、発掘調査時の3Dデータを用いてレプリカを作成しました。本来の遺構は、復元した瓦積塀の地下に保存されています。



写真 77 復元された瓦積塀と空間

御用米曲輪全体の整備が完成するまでにはまだ時間がかかりますが、これからも重なり合う江戸時代と戦国時代の遺跡を活かした史跡整備を目指します。

付 記

- 1 本書は、令和7年度国庫補助事業である「市内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の一環として刊行しました。
- 2 本書の作成にあたり、次の諸氏・機関に御協力いただきました。記して謝意を表します。
小田原城天守閣、湯浅浩、大貫みあき
- 3 本書の刊行は小田原市文化財課埋蔵文化財係三戸芽・佐々木健策が担当しました。土屋了介、田中里奈、加藤夏姫、早野路子、野頼弘美で内容・構成を検討し、市毛秀人、山口由美子の協力を得ました。
- 4 本書は、令和7年度に実施した第10次調査までの調査成果の概要をまとめたものです。本書の内容は、今後整理作業を進めていく中で変更となる場合があります。

主要参考文献

小田原市教育委員会 2016『史跡小田原城跡御用米曲輪発掘調査概要報告書』史跡小田原城跡御用米曲輪修景整備事業報告1、小田原市文化財調査報告書第179集
佐々木健策 2023『戦国期小田原の城と城下町—遺跡と景観にみる戦国大名』山川歴史モノグラフ43、山川出版社
佐々木健策 2024『戦国期小田原城の正体—「難攻不落」と呼ばれる理由』歴史ライブラリー 584、吉川弘文館

[表 紙] 3号切石敷遺構・5号蔵 [裏表紙] 御用米曲輪遠景（北東から）





ここまでわかった！御用米曲輪
—発掘調査から探る小田原城の歴史—

編集・発行 小田原市教育委員会
〒250-8555 神奈川県小田原市荻窪300番地
TEL:0465-33-1715 FAX:0465-33-1714
発行日 令和8年2月27日
印刷 株式会社石橋印刷